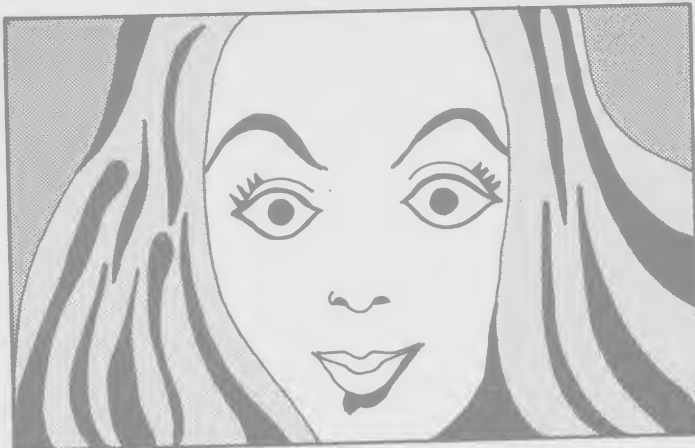
JERRY

PRESENTS

POST PUNK COMIC

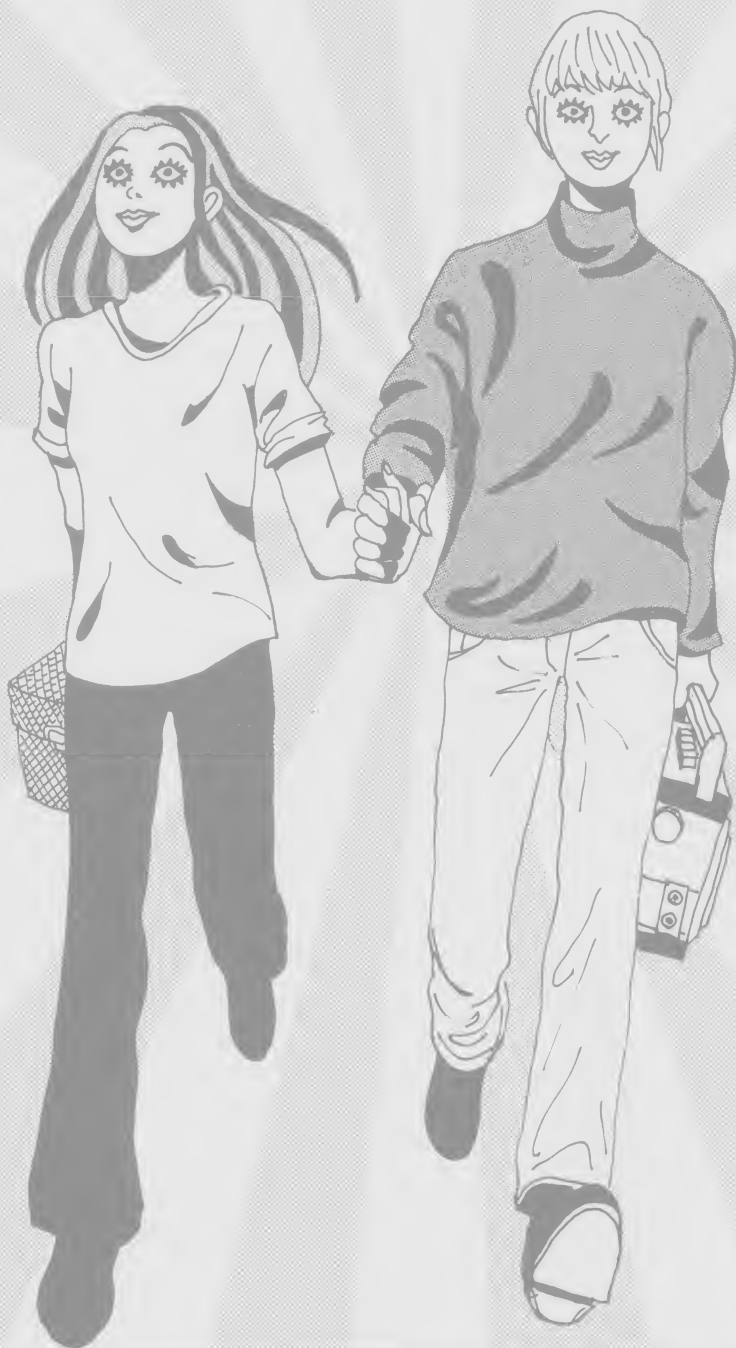
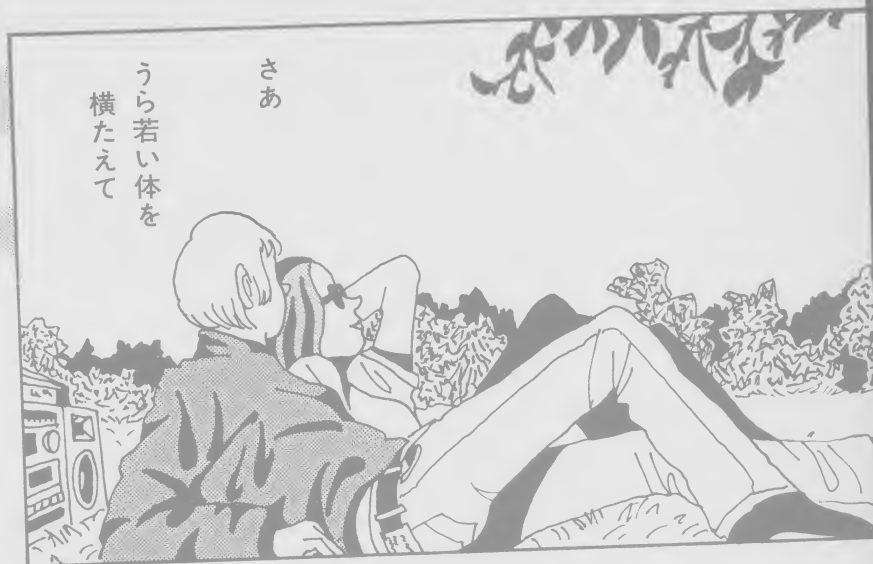
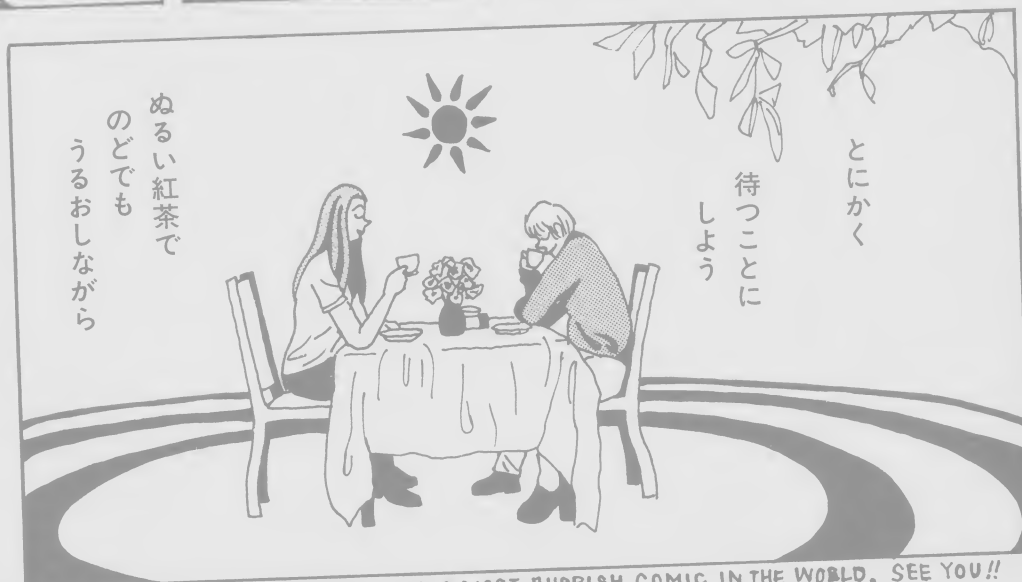
悪夢と
JOKEの
区別が
つかないのは
ボク

キミは
そんなボクと
世紀末を下品に笑いとばす

ha ha ha
ha ha ha

KILL
YOUR
MORAL

ボクらは
火葬場まで
バラ色の日々だと
いいはる

it's a wonderful life

今日のBGMは
「三六五歩のマーチ」

ボクらは隕石でも
待つことにしよう

THE END

DRAWN BY JERRY "MELODY" ©1992 THIS IS MOST RUBBISH COMIC IN THE WORLD. SEE YOU!!

Jerry インタビュー
「本当にまだ、入口にいます」

――出身はどこなんですか？

JE　長崎です。あの、中学が蛭子能収さんと一緒なんですよ（笑）。

――では漫画を描き出したのはまだ長崎にいた頃なんですか？

JE　描き出したときは福岡の大学にいた時です。

――一番最初に作品が掲載された雑誌はガロではなかったんですよね。

JE　ええ、「GIGA」が最初です。その後「アフタヌーン」で新人賞を貰ったんですがそれきりで後が続かなくって。それでまたその後「アクション」で新人賞を戴いて、そこでしばらく面倒をみていただいているんです。

――「アクション」では〝DeeDee工藤〟というペンネームで描かれていますね。

JE　応募したとき訳の分からない名前をつけていたので、編集者にペンネームを変えなさい、と言われたので、それじゃ〝ジェリー〟にしようと思って言ったら、「それはちょっとやめておきなさい」って言われちゃって（笑）。それであの名前にしたんです。そうしているうちにガロから「載ります」って電話を貰ったので、ガロの方はジェリーで描いていたから後から電話を入れてDeeDeeに変えてもらおうと思ったんですが、もう間に合わない、ということだったんで、結局そのままバラバラになってしまったんですよね（笑）。

――どの雑誌でも一回の投稿で入選しているわけですが、描き始めてすぐに漫画家になってしまったんですね。描こうと思った直接の理由はなんですか？

JE　大学の卒業を目前にしてダブッてしまったときですね（笑）。就職まで決まっていたんですが、一科目を落としてしまってもう一年田舎に残らなきゃいけなくなって、ちょっとスネてしまったんですよ。そんな時友達の所で漫画雑誌をパラパラとみていたら、それが全然面白くないんですね。「これだったら俺の方が面白いな」って（笑）。それで一発やったろうか、と思って初めて漫画を描いてみたんです。それが「GIGA」に載ったものなんですけれど。まあ、それまでは落書きのようなものはよく描いたんですけれど。

――原稿用紙にきちんと描いていたわけではないんですね。

JE　ええ、ノートの端なんかにチョコチョコという程度でした。高校の時など、クラスの内輪ネタなどで四コマを描いて友達と回し合いしてたんですが、なんか絵心のない奴が描くものってメチャクチャ面白いんですよ。そういった遊びに凄く引かれていたんですよね。それからはずっと何も考えてなかったんですが、就職を考える頃からまたフツフツと沸いてきて。

――最初に描きあげたとき、回りの人の反応はどうでしたか？

JE　読ませたら「なんだ、終わってるなあ」とか「ヒネクレてるなあ」っていわれました（笑）。中学三年の頃から少しヒネだして、でもあまりカッコイイヒネクレかたじゃなかったんですけれどね（笑）。それが卒業がだめになってしまってまた

ヒネクレた時、前に引きずっていたものが一緒になってしまって。だからそういう部分がきっと出ていたんだろうと思います。

——それは作品を読んでいるとわかるような気がしますね。こういう作品は好きな人と嫌いな人とに、はっきりと別れるタイプのものだと思うんですが。

JE　あっ、それだったら凄くうれしいんですけれど(笑)。

——そのヒネクレ方が結構ストレートに出ているようだし。

JE　本当はそこがねじりたい部分でもあるんですけれど、頭が悪いんですよ。だからああいうやり方しかできないんだと思うんですけれど(笑)。でも自分の中では変わっていける要素がまだあると思うんで、いろいろな事をやって行きたい、と思ってます。

——ガロを一番最初に読んだのはいつ頃だったんですか?

JE　まずどうしてガロを知ったかというと、もともとすぐ人に影響されるタチなんですよ(笑)。それで高校の時にとても重要な出会いをした友達がいまして、その友達に何から何まで影響を受けてしまったんです(笑)。で、その友達の部屋にガロがあって、そこで初めて読んだんです。でも、初めてみたときは、やっぱりある種のカルチャーショックを受けました。それに、そのふて腐れてモヤモヤした気分に妙にマッチしてしまったというか、それでガロが好きになったんです。だから、漫画を描こうと思った時、一度載ってみたい、と思ったんです。

——最初に読んだとき、どんな作家の作品がありましたか?

JE　よく覚えているのは根本敬さんの『父さんは星になった』(八四年一月号)です。村田藤吉がソファーにはさまれたままゲロをはいて窒息死するやつ。あれはもう理屈抜きでおかしかった(笑)。そういえば高校の時、よく黒板にあの村田藤吉の似顔絵を落書きしてました(笑)。

——なにか物凄くのめりこんだ漫画とか、影響をうけたものはあるんですか?

JE　好きなものはたくさんあって、というか無数にあるんです。だからターミネーター2も好きだけれどヌーベルバーグも好きだっていうように。もうよく分からないんですよ(笑)。その辺の中途半端さが漫画にも現れているのかもしれませんけれど。でも漫画家ではしりあがり寿さんが好きです。凄いですよ、話が。ふて腐れた人間の心をフォワ〜ッと和らげてくれるような感じで。四コマより普通の単行本にある話の方が好きだったんですけれど「コイソモレ先生」を丸々通して読んでみたら、もう心が洗われちゃって(笑)。あの、手を広げてポカポカという感じだけで「うわ〜、凄いなあ。自分には絶対にできないな」って思いました。

——漫画以外ではなにかありますか?

JE　六〇年代の英国です。音楽だけでなく風俗まで含めて、全部好きですね。あと音楽はもう黒人音楽が好きです。それも六〇年代のものなんですけれど、アメリカですよね。北はモータウン、南はスタックス、という頃のやつで(笑)。

——でもそういうものが好きだという雰囲気は漫画にも現れていますね。絵柄もなんだか懐かしいと思えるようなところがあって。六〇年、七〇年のころの感じが入っているようで。

JE　あっ、そうですか。自分では分からなかったですけれど、でも好きな部分が知らないうちに出ているのかもしれないですね(笑)

——これから、どういった方向で描いて行きたいと思ってますか?

JE　自分の漫画の内容は、なんか高校生でも描けそうな感じですから(笑)。だから作家といわれてホッペタが赤くならない程度には話をちゃんと描きたいと思います。前にガロの編集部に行った時、「もっとのめり込んで描いたほうがいい」って言われたんです「何か引いている部分があるから、もっと入り込んで描きなさい」って。それがずっと頭の中にあって、ところどころでそれを発揮しているつもりなんですが(笑)。でも今だにその辺は自分でも引っ掛かっている部分ですから。引いて描くのはそれはそれでいいと思うんですが、ちゃんと入り込んで描くのもやってみようと思ってます。でもまだそれをやってないので、ちゃんとやったところで、続けていけるかどうか、きっとその答えも出て来ると思いますので。本当にまだ入り口、という所ですね。

1993年4月12日

ガロ元編集者の証言❷

「天才的持ち込み原稿」

南伸坊（イラストライター）

原稿の持ち込み経験は二度あって、二度とも青林堂で、二度とも長井さんに見てもらい二度ともボツにされました。一度は高校生のとき、二度目は美学校の時で、長井さんは、色々とあのカスレ声で、やさしいこともいってくれたようでしたが、ようするにボツでした。ガッカリしたと思うんだけど、思い出してもそういう気分が起きません。ガッカリしなかったのかもしれない。長井さんの人柄だと思いますね。

自分が持ち込み原稿を見るようになって、長井さんのやり方をマネしました。せっかく持ってきた人をガッカリさせないっていうのは、しかし、むずかしいので、それはぜんぜんマネできなかったんじゃないかと思う。

のちのちになって、原稿をボツにした新人の人が、よそで認められて、売れっ子になったりで「実は、南さんにボツにされたんですよ」みたいな話を、何度か、パーティーのようなところで聞かされました。

「すいませんね、見る目がなかったんですねえ」というしかないので、見る目がなかったのはホントウです。よくあんなこと平気でしてたなと思いますが、しかたない。

ボクも持ち込みをした時は、自信満々で、「よもやボツになることはあるまい」と思ってましたが、ぜんたい持ち込みをする人には自信家が多いと思いますね。

極端な自信家がくると、話題を提供してくれますから、ひとしきりその自信家の言動の細部を思い出して盛りあがったりすることもありましたが、たいがいは、けっこうコマってました。

作品が自信の裏打ちになるようなものであれば、それがつりあってなくたって、まア、いいけれども、まるでハシにもボーにもかからないようなものに、えらく自信をもってるケースが多々あって、そこのところを、わかってもらうのはムリだから、なんとか、おひきとりいただく算段をするんだけれども、断じて帰らない。

もちろん、ロコツに「あなたの作品は、ハシにもボーにもかかりません」なんてことはとてもいえないから、なんとなく、態度で、冷たくしたりしますが、もちろん、そんなものは屁とも思わないから、遂には全員、無言の行に入ったりなんてこともあった。

全員が、黙ったところで、天才の人は、一人演説しながら、せまい編集部をウロウロ歩き回る、というような具合で、凡人としては、早く、この悪夢のような時間の終わるのを待つしかありません。天才はこまりましたね。

そんなことだから、あたら有為な才能を見落してしまったのだ、とお叱りをうけるかもしれないが、そういう人には、ぜひ、天才のその作品を見てもらいたいと思います。

ガロ元編集者の証言③

「正しい持ち込みの人」

渡辺和博（イラストレーター＋コラムニスト）

思い込みが大切

僕がガロにいて一番目に面白かったのが、持ち込みの人の原稿を見ることだった。

一番面白かったのはもちろん長井勝一氏の金日成抗日ゲリラとの戦い。共産匪征伐談であったが、これはまあ戦時中のことだから別の話として取っといてですね。

僕のいた当時の編集部は今と同じ材木屋の二階にあって、急な階段に返本の階段が出来ていた。

現在は営業本部長谷田部君の努力によって返本の山は束くらいには成ったと聞かされている。

さて当時（昭和54年頃）の世の中は長髪もそろそろヤメにして髪を切ろうとする若者が出始めたころだ。

早い人はすでに腰までの長髪を切って、テクノカット（なつかしいなあ）にしていた。

しかし、多くの業界人はまだ長髪とヒゲを当ててなくては公衆の面前に出られないと信じていて、アングラな集まりに行くと必ずヒゲとサングラスの大集合で、髪の短いのは坊主頭の暗黒（暗黒舞踏のこと）だけだった。

ガロに持ち込みに来る人もたいてい長髪かサングラスかヒゲか、それらの混合したものであった。

持ち込まれる作品と本人のファッションは何も関連が無い、大切なのは作品の出来であって、洋服が高いか安いか、赤いか黒いかはこのさい問題にすべきでは無い、と思っている人がガロに持ち込む人のほとんどだったので、実際持ち込む人はみんなフツーで地味だった。

しかし、僕は持ち込まれる作品より本人の顔と体型、話し方、方言の有無、自信の有無、住宅の間取り、ガールフレンドの有無等々を問題にしていたので、作品を見るフリをしてそっちばっかり見ていた。

そして分かったことは、やはり漫画も成りきりが大切ということであった。

つまり、永島慎二先生のコピー作品を書く人はたくさんいたのだが、その中で一番いい人は永島先生になっちゃってる人、であった。

僕は書道の先生から、思っていることは必ず手に出る、というアリガタイ意見をいただいたことがある。

先生によれば、思っていることは必ず手に出るのだけど、スムーズに手に出るようにするためにはお稽古が大切であるとのこと。

持ち込みをする人は、まず思い込みを強くして漫画を書き、それから思い込みをさらに強くして編集部に持ち込むといいのではないだろうか。

もちろん、思い込みもレベル①から④まであって、それを確かめるのは編集部の仕事だと思うので、それ以下の場合はあきらめて家に帰るしか無いと思うけどね。